

23、 眞俗二諦

「一宗の教旨は仏号を聞信し大悲を念報するを之を眞諦と云い、人道を履行し王法を遵守する之を俗諦と云ふ、是即ち他力の安心に住し、報恩の經營をなすものなれば、之を二諦相資の妙旨とする」と教えてあり、浄土眞宗に流れを汲み、無上の妙法に逢わして頂いた者は俗諦門を慎まねばならないぞ、鳥の両翼の如く車の両輪の如く両方が揃わなければならぬぞと教えているが、又一方、自性は治らぬが自性、治して来いと仰らないからと、ずばらをこき、放縦に流れながらこの者をお救いと自ら許して浄

土へ暴れ込もうとしている者もいる。

又俗諦門が出来れば往生は一定の思いに住する者もいれば、俗諦が守れない時は往生不定の思いに住する者もいる。俗諦門の如何によつて往生の定不定を定むべきものではない。而し信仰の徹底している者が殆んどいないから、俗諦門の行儀を以て真諦門の助太刀をしようとしているのである。

法龍はそのように俗諦門の行儀を以て真諦門独自の作用を左右してはならないと思う。真に真諦門が徹底すれば自然の徳として俗諦門は守れるのである。

何故かと言えば、光明無量に照らさるれば何が出て来るか、鏡に近寄れば姿が見えなければならぬ。法に近寄れば鏡が見えなければならぬ。然るに法を聞けよ、鏡を見よ姿を見るでないと包んでいゝに等しく、馬鹿の言う事ではないか。又死後のみを教え、この機に用事はないと包んでいゝのだから逆謗の屍が照らし出されぬのだ。照らし出されぬから懺悔がないのだ。道綽禪師は照らし出された姿を罪悪観と教え、善導大師は信機と説かれたのではないか。自分の機が見えない

のは法の鏡が曇っているから見えないのだ。死後の往生のみを夢見ているから見えないのだ。仏凡一体機法一体の境地に立てば、動く心が見えるのだ。猛火に包まれている事が判るのだ。毒煙を吐きつつある事が知らさるるのだ。心口各異も綺語も非理邪行も照らさるるのだ。恥ずかしいも、改めますも嘘詐りだ。その場その場で燃やしているのだ。見えれば見ゆる程、慎みと成っているから光明無量に照らさるれば、俗諦門を慎まねばならないではない、自然の徳として慎まらずにはいられないのだ。

寿命無量に貫かるれば、露の如き、幻の如き、影の如き、夢の如き、無常の命も永劫生き抜く力を与えられ、強い自信と深い慈悲とに生かされ、溢るる恵みと豊かな慰めを得て、地上に於ける最大な果報を讃えつつ、何の不安も危惧もなく使命を果たさして頂くのが真諦門ではないか。

仏号を聞信し大悲を念報する、言うは易く体験は難しい。人道を履行し王法を遵守する、語るは易いが実行は難しい。名号を如実に聞信すれば、真諦の儘が俗諦だ。精神の儘に肉体は動くのだ。信仰のままの生活でなくてはならない。挙体往生に向えば

真諦門しんたいもんであり、
拳体生活きよたいせいかつに向えばむか俗諦門ぞくたいもんである、
念仏ねんぶつの儘ままの生活せいかつでなくてはならない。